

<講演>山上国際学寮 母と歩いた広島

片田 靖子

私は5歳の時、母と東京から母の実家九州天草に行く途中、広島で被爆しました。8月7日に広島に入っているのです。入市被爆者になります。2歳の弟も一緒に、母は妊婦でした。市内を歩いた時のことを母は手記に書いていました。

母（江口ヒデ）の手記より

市内に入っていくにつれ、あちらに一塊、こちらに一塊、死んでいる人、半分死にかかっている人、すっかり焼けてしまった黒焦げの死体など、もうそれはこの世の地獄としかいいようのない有様に、あまりのむごさに目を覆いたくなるような状態だった。もうあと何時間も生きていられない人だろうか「苦しい、痛い痛い、兵隊さん水をください、水を、水を…」と言う人。「お母さん、お母さん」とよんでいる若い女の。焼けただれた電車の中も死体でいっぱい、鮮紅色で全裸のままで息絶えている人。防火用水の水そうの中に首を突っ込んで、上半身は水の中にそのまま残り下半身はすでに真っ黒な木炭状のまま焼け焦げて死んでいる人。私は当時を思い出すと、あまりのむごさに今でもペンを持つ手がふるえてくる。

母の手記があってよかったと思っています。

本当は私が被爆体験を話すといいのですが、広島市内でのことは覚えていません。同じ5歳の方でもよく覚えているのに申しわけない気持ちでした。最近になって判ったことですが、天草に着いた時、従妹に「広島はこわかった」と言ったそうです。それっきり誰れにも話すことはありませんでした。天草に着くとひどい下痢と高熱に苦しみました。

小学校5年で東京に戻り、27歳で結婚する時、母から「被爆者手帳をとりなさい」と言われて「えっ、私、被爆者なの」とびっくりしました。心的ショックでしょうか、あの日の記憶がないのです。ただ血で真っ赤なガーゼのようなもので顔をおおっていた人のことだけは覚えています。

母はよく病気をしていたので、私も子どもや孫の健康への不安は続きます。孫が小さい頃、「よく鼻血を出す」と聞くと胸をつかれました。被爆者はずっと被爆者なんです。二度とこんなことがあってはならないと、退職後、母が残した手記を元に私の空白になっている体験を埋めながら語っています。

退職してから大田区内にある被爆の会や東京の会に参加し、被爆者の苦しみや悲しみ、怒りを聞きました。また「この病気は原爆症であると認めて下さい」と国に対しての裁判もあり、皆さんと傍聴に参加しました。多くの方々の支援で勝利した時はうれしかったです。

核兵器禁止条約が発効されましたが、日本政府はこの条約に参加を決めていません。残念で恥ずかしいことです。子どもたちが核兵器も戦争もない世界で生きられるよう、被爆者として訴え続けたいと思います。

最後にこの方のことばを皆さんに紹介したいと思います。

被爆者からあなたへ

もうすぐ傘寿（80歳）になる私が
被爆者運動を続けているのは、
「ふたたび被爆者をつくるな」という願いからです。
あなたを含む世界のすべての人々を、
あの“地獄”に遭わせたくないから、
あの悪魔の兵器がある限り、
私は目を閉じられないのです。
青春を大切にしてください。
あなたたちの未来はあなたたち自身のものです。
自ら考え、自ら歩んで、自らの手で
“平和と未来”をつかみ取ってください。
それが“地獄”から生き残った私の願いです。

藤平 典

元日本原水爆被害者団体協議会代表委員
「孫娘への手紙」より